



多谷昇太

それからどれくらい経っただろうか？何かの拍子で突然目が覚めた。目が覚めはしたがまだボーっとしていてなぜ目が覚めたのかすらわからない。壁時計を見ると針は2時を指している。当然午前2時だろう。「ちえっ、寝込んだしまったのか」と舌打ちしてやおらソファベッドから立ち上がり台所に行く。取り敢えず迎え酒（迎えウイスキー？）を一杯やる為に冷蔵庫の氷を取り出そうとしたところで表からドアをノックする音が聞こえた。さすがの俺もギクリとする。え？ノック：？おいおい夜中の2時だぜ。いったい誰がこんな時間に訪ねて来たというんだ？全体まだ酔いが残っていてただの空耳なのかなとも思い、音を無視して冷蔵庫の氷を取り出したところでまたノックされた。空耳なんかじゃない。間違ひなく誰かが訪ねて来て居、ドアの外に誰かが居るのだ。俺は「はい。ちよっと待って」と外に返事をし、取り出した氷を冷蔵庫に戻した。まさか件のヤクザ？と一瞬危惧したがまずあり得ないことだ。調べる気になれば俺の住所ぐらい容易に

割り出せるだろうが事はまだそんなに切迫していない筈だ。俺のアップしたユーチューブへのコメント欄に何度か脅迫めいたことを言っただけでそれ以外の具体的な脅しは一切ないのだ。いきなり、しかもこんな時間に訪ねて来よう筈もない。しかしそれならいったい誰？何者なのだろう。緊張するにつれて昨晩来の別の恐怖が襲い来もする。例の突然開けた霊視だった。まさか：ドアの外にとんでもないモノでも立って居はすまいな？おれは恐る恐るドアに近づいてドアスコープに目を当てた。するとそこにはノースリーブと思しき一人の女の姿があつた。ドア近くに立って居るので肩より上の姿しか写らないがそれが裸なのでノースリーブと判断したのだが、しかし今は10月下旬でしかもこの時間なら外はおそらく15、6度だろう。いくらなんでもノースリーブでは寒かるうに：と不審がったのと、さらには一瞬「え？ミキ：？」と錯覚するほどに女の雰囲気かミキに似ている気がしたので些かでも亡失してしまい、ドアを開けるのを忘れて、俺はなおもドアスコープにかじりついてしまう。しかしよく見れば明らかにミキではない。年の頃25、6くらい、ナチュラルショートヘアをした、何と云うか日本人とも外人ともつかない、いかにも魅惑的な女性

【さあどうぞ…と誘う“全裸”の女性の手】



である。どう魅惑的なのかはこのあと詳述するがとにかくその女がこちらがドアの内側で逡巡しているのを見透かしているような笑みを浮かべて今一度ノックした。ノック音が腹に…い、いやナニにやけに響く。俺は衝動的に「はい」と返事してドアを内側に大きく開けた。『こんな時間にいったい何ですか？誰ですか？あなたは』と詰問しようとしたのだが絶句するほかなかった。目の前に立つ女性はなんと、全裸だったのだ…！

ニツとばかり俺に微笑んでから女は軽く目を閉じて合わせた両の手の平を右頬に当てる首を右側に傾け、同じ動作を左頬に当てる繰り返したあと、今度はその両手の平を胸の前に持ってきて俺に合掌し『起こしてごめんなさい、こんな時間にごめんなさい』とでも云うかのように軽く頭を下げて見せた。そんな動作をせずともその旨を口で云えばいいだろうに（それと全裸の分けも）何も云わない。しかし何と云うかそのゼスチャアがあたかも何かの魔法のようで、全裸というこれ以上はない相手に対する無防備で無警戒な姿とともに、一瞬の内に俺を、魔法のハグのうちに取り込むようになった。俺は呆気にとられながらも意味もなく「い、いや…」とつぶやいたあとで、とにもかくにも女を部屋に招き入れようとする。

こんな姿を住人に見られたら事だし、何よりも、魔法の力に進んで取り込まれようとしたからだろう。しかしそれにしてもよくこんな一糸まとわぬ姿でここ

まで来れたものなどと危ぶみもするがとにかく女を中に入れたかった。正直云って経緯はもうどうでもよかった。忽然と現れた女の、その垂涎の肢体と云い、ミキに紛うその醸す雰気と云い、否も応もなかった。俺はぐくりと唾を飲み込んでから「ま、まあ、と、とにかくどうぞ。入ってください。部屋に」と云って自らの身体を横に退かせ左手をふって中に入るようにと促す。しかし女は「いいえ（入りません）。でもそう云ってくれてありがとう。私のご主人様、私の王様。今夜はこれからあなたをお伽の国へとお連れします。さあ、どうぞ」と答えて俺に手を差し伸べる。イントネーションのやわらかい綺麗な日本語だ。しかし正直云って女が何を云っているのかわからない。なぜ俺が彼女の主人で王様なのか。ひよっとしてこの女は狂人なのだろうか？対応を決めかねている俺に「ピュグマリオン様、わたしはあなたが造った彫像です。あなたに見て、感じてもらいたい世界があります。さあ、〃敷居〃を越えてください」と云って両手を前に突き出し俺を求めような仕草をする。その仕草が（ここではお門違いかも知れないが）中国の小説家である龐名が「桃畑」内で述べた「地面にある石の向こうから聞こえて来る音があった」という、この一文章だけで読

者に次元の壁を越えさせるような、見事なフレーズを俺に想起させ、かつ俺に次元の壁を越えさせる効果を催させた。俺は夢見るように彼女に手を差し伸べながら敷居を跨ぎそして〃次元の壁〃を越えた。背中でドアが閉まる音がしたが、これが三次元、つまり現実社会との乖離を告げる音として聞こえる。俺は彼女の求めに応じるようにその両脇の下から背中にも両手をまわしこれを強く抱きしめる。するとあの時と同じ、すなわちバー・アンバーの着替え室でミキを抱きしめた時と同じ感じが、胸に込み上げてくる熱いものを抑え切れない感じがした。彼女も…いや、これからは彼女をイブと呼ぼうか、パラサイト・イブのあのイブと同義になると思うが。とにかくそのイブも顔に喜悦の表情を浮かべて狂おし気に胸を押しつけてくる。続いて俺の左右の手を取ってその乳房を、腰を、身体中を好きなようにまさぐらせる。これもあの時と同じだが違うのはミキが耐えるような表情を浮かべていたのに対して、イブにはそれが無い。俺の手によるまさぐりのひとつひとつがそのまま彼女の魂に直接触れるかのよう

【地面にある石の向こうから聞こえて来る音があった…なる小説「桃畑」からの抜粋】



な、あたかも『やっと巡り合えた。(こ主人様と?)
直接触れ合えた』とでも云わんばかりの喜悦の表情を

呈するばかりだ。そしてまさぐる俺に於てもただ肉欲・煩惱の類でそれを為しているような感じがせず、イブ同様の感覚を共有することが不思議である。何と云うか、久しく放ったらかしにしておいた大切なものと再会し得た、抱(いだ)き合えたというような感覚がしたのである。さらに傍目から見れば言語道断も甚だしいこの男女交歓の場を、ましてイブの全裸姿を見られたら大変という、催してしかるべき危惧がまったく起きないのも不思議だ。深夜とは云え、公けの場における睦み合いを暫時堂々とやつてのけたあと、イブは互いの喜びを確認し合えたとも云うようにコクリとひとつ俺にうなずいて見せ、次に『では、さあまいりましょう』とばかりに俺の手を引いて階段へと誘うべく背を向けて歩き出した。それに従ったがしかし階段デッキの縁まで来たところで俺の足はピタリと止まり剩(あまつさ)えイブの手から俺の手を引いてしまふ。なぜなら、イブの身体が階段を降りて行くのではなく何と空中に浮かんだからだ！三次元の当たり前感覚、常識感覚からして俺は少なからず怖気づかざるを得ない。これは…とばかりまじまじとイブを見据えてしまふ。やはりこの女は幽…?という類の怖気がしたからである。それに気づいたイブは俺に向きなおると

片膝をやや折って腰を屈め、哀願するように両手を合
わせる。どうかそのまま来てと身悶えせんばかりの切
なげな表情を浮かべて。この光景はかなり感じは違う
がかの映画「エクソシスト2」内でリチャード・バー
トン演ずる神父が超能力者コクモから「Show me your
Religious! (汝の信仰を示せ!)」と迫られた場面と
通じるような気が俺にはする。生身の身体が階段を踏
み外す恐れと云うよりもあの『やはりこの女は幽…?』
という(至極エゴイスティックな)危惧をぬぐえない
のだ。さらには万が一自分の身体も宙に浮いてしまっ
たら?という未体験ゾーンへの恐怖もある。しかし腰

【空中に浮かぶイブのイメージ…from pixabay】



を低くして懇願するイブの姿に『田村さん、きつとね』
と念を押ししたミキの姿が重なり、俺はここぞ自分の

Religious (1)ここでは信念 or 決定とでも捉えられたし
を示すべき切なる場と心得た。おもむろにイブに手を
差し伸べながら俺の位置よりやや上方にいるイブの位
置から憶測して、現実にある下り階段のステップへで
はなく、むしろ上向きのスロープに踏み出すがごとく
に足を踏み出した。すぐにイブの手が伸びて来て俺の
手を掴むと強く引いてくれる。下り階段を二段ほど踏
み外したごとくに下に身体が落ちると思いきやさにあ
らず。サンダル履きの足の裏に土と草の感触を感じな
がらイブに引かれるままに「目に見えぬ」ゆるやかな
スロープを俺は歩み出した。イブが俺に繋いでいない
自分の右手を胸に当てて上を仰ぎ見、なにごとか呪文
のような、祈祷のような言葉を口にする。それは英語
ともラテン語ともつかない、しかし不思議とどこかで
聞き覚えのあるような、耳にやさしく響きくる言葉だ
った。すると次の瞬間なんと云うか、全身に「光のシ
ヤワー」を浴びたような感覚を一瞬覚えたあとで、い
きなり今の団地の階段とは異なる、まったくの別世界
にいる自分を発見するに至ったのだ!どことも知れぬ、
草がところどころに生えている丘陵を俺はイブに手を
つながれて歩いている。いずこともなく女声でイスラ
ム教の祈祷のような歌声が流れてくる。♪シメーニ

カ・ホダー、アズラエル、ヤサカマバー・タアマール）
♪なんとも心を天に誘われるような神秘的な歌声だ。

〔※中途ですがその歌とは←オフラ・ハザを：
<https://youtu.be/EkovmbvM-o>〕その歌声に合わせて
上空の夜空を仰いだ途端俺の足は止まった。イブが俺
を見返って微笑む。なぜ俺が足を止めたのかを理解し
たからだ。実に！そこには満点の星空が広がっていた！
心が一瞬で30年前に赴いたアフガニスタンの夜
空にタイムスリップする。往時これと同じ満天の星空
が広がっていたのだ。日本の公害の空しか知らない俺
だったからその時は本当にショックだったが、もつと
もいまはそれ以上のショック状態にいる分けである。
四方を見渡せば人っ子一人おらずこちらもアフガニス
タンの荒野にいるような塩梅だろうか。幻聴のように
響く女声によるアザーン（せん塔に上って礼拝への呼
びかけをする声）を除けば完全にシーンとしていて物
音ひとつしない。この情景と俺のいまの心情を述べる
のに格好な拙詩が一編ある。これは以前に俺がアフガ
ニスタンの夜空を思い出して、帰国後につくった拙詩
なのだが、いっそこれを披露した方がいまの情景をく
どくど述べるよりも早かろう。

「アフガンの夜」

魅せられしはアフガンの夜。

星の光のあまりの明るさ、美しさに、

わがこころ驚き、すなわち哭きぬ。

斯くも静謐なる光を受けるなら

妖精らも出でむ、月の女神も舞い降りむ。

幼子に戻るか、伽の世界へ行くか、知らず。

現し世のすさみから放たれ、

原初の世界へ誘われんとする、そは魔法なめり。

女神よ、舞え。妖精（こ）らよ、遊べ。

もの皆なべてこの光のもと安逸たれ。

我とてもえやは受けざらん、この原初のやさしき光

ムーンシャワー、スターダスト浴びるがに。

国の人あらば見せまほしきよ、云いまほしきよ、

我らが国の夜空（そら）は空にあらずと。

失われおりしはこの満天の星空、それに比すべき我が

が清心たりき。

毒心、邪心、欲念、もろもろの不浄、この光のもと、

みな洗い流さばや！

流れ来るコーランの祈り声に、回教徒ならずとも額づ

き、また起きては、その声がむた（※とと共に）星の世界へと飛びたたざるや。

かくこそ思われ、このアフガン夜空に…

この昔綴った拙い詩が正直云っていま居るこの情景にピッタリと合うのだ。この詩で云えばイブが「月の女神」に当たるとは、そのイブが「ほら、ご主人様、あれがわたしの紡ぎ台です」と彼方を指差す。見ればハナモモと思しき数本の木があつてその樹下に一台の糸紡ぎ台が置いてあり、その糸で織りあげたのだろうか、銀色をした絨毯が一枚地に敷かれていた。そこへ俺を誘い無理にでも横たわらすと「さあ、この上でお寛ぎください。お休みください。ご主人様。わたしが紡ぎ歌を歌つてさしあげます…どうか…あなたを想うわたしの絶えざる営みを…どうか」と云つてやおおら紡ぎ台の前に置かれたスツールに腰掛け、満天の夜空に両手を差し伸べる。するとその満天の星々から直接放たれたごとくに、またスターダストが変じたがごとくに、無数の銀色の糸がイブの両の手にふり注いだ。その糸を束ねて撚りながら紡ぎ台の穴に差し入れ、ペダルを踏み出す。糸車がまわり出しボビンになんと

も柔らかそうな銀色の糸が巻かれていく。時に糸車の左右の回転を変え、プーリーの大きさを換えたりしながら見事なデザインの色が出来上がっていく。つむぎ歌をイブが歌い出した。

♪…さあ紡ぎましょう、織りましょう。見事な糸を、織物を。コトトンコトトン、コトコトトン。そしたらあの方が、わたしの主人が、この布を見事に仕立て、着こなすでしょう。街を歩くでしょう。そうしたらきっと、道行く人々がふり向いて、わたしの主人の立派さを、紡いだわたしの労苦を褒めるでしょう。ああ、嬉しい！…それをよすがに、さあ、今日も紡ぎましょう、織りましょう。コトトンコトトン、コトコトトン…♪

「※紡ぎ歌。PS Moon 月魚・銀の糸のつむぎ歌をお聞き下さい。 <https://youtu.be/G1wHoj995yc>」

イブの歌声が、つむぎ歌の歌詞がストレートに心に響いてくる。そのまま俺の心に理解される。いま横たわっているこの銀色の絨毯から伝わってくる、俺を癒し、包み込むような、そこに織り込まれた波動とともに。

『ああ、そうだ。イブの歌っていることは本当だ。彼女はここで絶え間なく糸を紡ぎ、布を織ってくれていたのだ。この俺のために！…それなのに俺は、この無

垢なる糸を、布を、世の中に媚びたり突っ張たりしな

【みずからが着る服をも解いて銀の糸にしようとす

イブのイメージ…by efes・from pixabay】



がら、ただ己（おのれ）を生かさんがただけに仕立て上げて、畢竟変形させ汚しながら使っていた。そしておそらく、そうすることでその都度、イブの織った布は消えていたのだろう。この醜い俺の自我我欲と自己保存の心に調和できず、それと相殺する形で…」

「ごめんなさい…」俺は思わず（感極まって？）イブに詫びていた。この糸は、布は天上の光そのものだ。

そしてそれを受ける、器たる人の心が、つまり俺の心が汚れていれば光まで汚れ焼けてしまうのだろう。それにもめげずイブはずっと糸を紡ぎ布を織り続けてくれていたのだ。ひよっとしてイブの裸の分けも…自分の服までも、糸に解いて？…。俺はもう「この野郎！」とばかりおのれをどやしたくなる。実際こんなこととはまったく知らなかったのだ。土台知りようがあるのか？俺のみならずこの世に生きるすべての人間においてだが。毎日毎日利欲と自己保存に明け暮れる俺やあなたのために、無心に天上の光を送り続けている存在があることなど、そも誰も思いもしないだろう。そのようなすでに「デフォルトになっている」ただひたすらに自己中心的な我々の生活パターンの中で、これに気づくことは至難の業だ。いまの俺のような、彼の「クリスマスキャロル」中のゴーストによる論しとでも云

うべき、このような目に会わなければ恐らく誰も終生
気づくまい。だがそれからすれば「なぜ、俺なのだろ
う？」と不審に思わざるを得ない。なぜ俺だけこのよ
うな目に会うのか？…いい、いや、会うことができたの
だろうか？と。あのバー・アンバーで貸し切り接待を
受けた時と同じ疑問をもよおす俺が居た。ゼンたいミ
キから頭に打たれたあの注射、中に仕込まれていただ
ろう麻薬のせいなのか？もしそうなら畢竟アイツの、
初老の黒メガネ野郎のご託宣ということか？…そんな
バカな。奴は悪そのものだろうしそんなことは笑止で
しかない。しかしとは云えそれ以外に原因があっただ
ろうか？先の、急に霊視が開けたことと云いこのイブ
との遭遇と云い、奴の施した魔薬以外に原因は考えら
れない。慮る俺にイブが紡ぐ手を止めて「そうです、
ご主人様。わたしが魔王の施術を利用したのです」
「え？魔王？利用した…？」「はい。本来ならあなた
とこうして直接会うなど、とても考えられなかった。
ですからもう久しくもどかしく思っていましたのに、
奇しくも魔王の施術を目撃して、あなたに霊能力らし
きものが開けたのを知って、そして、だからわたし…
そこを突いたのです」そうか…とばかり不思議に合点
できる俺。それは先のイブのつむぎ歌がそのまま俺の

心に理解されたのと同じ塩梅だった。しかし同時に何
か得体の知れない危惧を感じ、胸騒ぎを覚える。魔王
の業を利用したなんて…そんなことをしてはたしてイ
ブはだいじようぶなのか？「はい。でもわたし…どう
してもあなたにつむぎ歌を聴いてほしかった。あなた
を想うわたしの心を知って…」それに答えるようにイ
ブが語るのだが突然「ハッ！」と一声を上げて中途し
た。恐ろし気に夜空を見渡す。するとそこには星々か
ら生じたごとく垂れさがっていた銀色の単糸がいつの
間にか禍々しい蜘蛛の糸に変わっていて、俺たちを、
就中イブを絡め取るように思われた。続いて中空に魔
王の笑い声が響きわたる。

(続く…)



【魔王の糸に絡め取られたイブのイメージ】



【ミキに（イブ）に執着するミAD博士のイメージ】